

HPVワクチン接種

■3年ぶりの市民医学講座

9月24日、由利本荘市カダールで、由利本荘医師会・由利本荘市およびにかほ市の三者共催による「第93回由利本荘・にかほ市民医学講座」が3年ぶりに開催されました。

今回の市民医学講座のテーマは「地域から子宮頸がんを撲滅させるために〜HPVワクチンの重要性〜」でした。

女性特有の子宮頸がんは95%以上でヒトパピローマウイルス（HPV）の感染によって発症するがんと言われていています。裏を返せばウイルス感染を予防できれば撲滅できるがんということになります。HPVワクチンがそのためのワクチンです。

■HPVワクチン接種の開始と中断

日本では年間約1万人の女性が子宮頸がんを発症し、約3千人が亡くなっています。しかも最近では20歳から30歳代の女性の子宮頸がん罹患率・死亡率が増加しています。

HPVは50歳までの女性の約80%以上が一度は感染すると言われていています。100種類以上あるHPVのうち子宮頸がんを引き起こす高リスク型は13種類です。また、接種対象が13歳から16歳なのは、このウイルスが性交渉によって感染することから中学生期がワクチン接種の適齢期とされているためです。

日本では平成24年から13歳から16歳の女子へのHPVワクチンの定期接種が始まりました。これにより国内の子宮頸がん

んはほぼ征圧できるものと多くの人が期待しました。ところが、定期接種は開始からわずか1年で実質的に中断となってしまいました。それはワクチン接種後にけいれん等の症状を訴える人が相次ぎ、マスコミ報道で「子宮頸がんワクチン（HPVワクチンのこと）は危ない」という空気が広まり、政府が積極的勧奨を停止してしまっただけからです。

■世界の認識は

当時のHPVワクチンに対する世界的認識は安全で有効であるというものでした。WHOもHPVワクチンの有効性と安全性を何度も宣言していました。その後も世界各国でHPVワクチンの効果が証明され、日本でもHPVワクチンの有効性を裏付けるデータが次々と報告されました。現在、国内のほとんどの小児科医などの医療関係者は、HPVワクチン接種によって発症したと言われている症状はこの年頃の女子に見られる「心身反応による機能性障害」であって、HPVワクチンが新たな病気を生み出したわけではないと認識しています。

いまHPVワクチンは世界140カ国で承認され、110カ国で定期接種となっています。日本も今年の4月に12歳から16歳の女子に対するHPVワクチンの積極的接種勧奨を再開しました。また、9年間のブランクで接種を受けられなかった女性へのキャッチアップ接種も始まりました。日本もようやく世界の流れに戻ったわけです。

■男子にも有効

実はHPVは男性に多いとされる咽頭がん、直腸がん、肛門がんなどの原因でもあります。ゆえに50カ国で男子へのHPVワクチン定期接種も行われています。

日本ではHPVワクチンを「子宮頸がん予防ワクチン」と呼んでいるために、女子のためのワクチンと誤解されてしまっています。この誤りは早急に正されなければなりません。

■言いたいこと

現在、国内の定期接種で使用されているワクチンは2価と4価です。子宮頸がんの約90%を予防できる9価ワクチンは任意接種のままです。そこで市は今年度から予防効果の高い9価ワクチン接種への全額助成を開始しました。全国ではにかほ市だけです。また、男子への公費助成によるHPVワクチン接種の導入もいま検討しています。

HPVワクチンについては一部に反対する声があります。ですが、HPVが原因のがんをワクチンで征圧できるならば、子どもたちの未来のためにHPVワクチン接種の推進をためらうべきではないと私は考えています。



にかほ市長
市川雄次

創造を

想像する

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。